青年期の甘えの諸相ー親密性と個人志向性の否定的側面ー

浅原　千鶴・山口　一[1)]・井上　直子[1)]
[1)] 桜美林大学大学院心理学研究科臨床心理専攻

Aspects of Adolescent Amae : Intimacy and Negative Aspects of Individual Orientation

Chizu ASAHARA，Hajime YAMAGUCHI [1)]，Naoko INOUE [1)]
[1)] J.F.Oberlin University Graduate School of psychology Department of Clinical Psychology

キーワード：甘え，青年期，親密性，個人志向性

抄録：本研究は，青年期後期の大学生を対象とし，多元的「甘え」尺度（玉瀬・相原，2004）の 4 つの下位尺度得点を用いて Ward 法によるクラスタ分析によって群分けを行い，どのような甘えを持つ群が存在するのかを調査した。更に，それぞれの群が親密性および個人志向性の否定的側面において，どのような特徴を示すのか検討した。

方法は，都内私立 A 大学に在籍する大学生 280 名を対象とし，質問紙による調査を行った。調査には，多元的「甘え」尺度（玉瀬・相原，2004），「親密性尺度」（谷・原田，2011），「個人志向性 N 尺度」（伊藤，1995）を用いた。

因子分析の結果，多元的「甘え」尺度は 4 因子 18 項目，親密性尺度は 1 因子 9 項目，個人志向性 N 尺度は 1 因子 6 項目が得られた。各下位尺度得点から相関分析を行ったところ，「甘え拒絶」と「甘え歪曲」，「甘え受容」と「親密性」には中等度の正の相関が，「甘え受容」と「甘え希求」，「甘え歪曲」と「甘え希求」，「甘え歪曲」と「個人志向性の否定的側面」に低い正の相関がみられた。「甘え拒絶」と「親密性」，「甘え受容」と「個人志向性の否定的側面」，「親密性」と「個人志向性の否定的側面」に低い負の相関が示された。「甘え受容」と「甘え歪曲」の間には無相関であった。次に Ward 法によるクラスタ分析を行った結果，3 つのクラスタにわかれ，それぞれ「相互依存的甘え群」（170 名），「屈折した甘え群」（67 名），「甘え低群」（43 名）と命名した。「親密性」，「個人志向性の否定的側面」得点がそれぞれの群で異なるのか一元配置の分散分析を行ったところ，「相互依存的甘え群」と「甘え低群」は親密性が高く，個人志向性の否定的側面が低いことが示され，「屈折した甘え群」は親密性が低く，個人志向性の否定的側面が高いことが示された。この結果から，対人関係において適応的な群は「相互

依存的甘え群」と「甘え低群」であり，不適応的なのは「屈折した甘え群」であると考えられた。本研究では，「甘え低群」が一定数存在し，また健康的な対人関係を持っていることが示唆され，これは一概に，「甘え」には健康的な側面と不健康な側面というだけでなく，甘えないこともまた対人関係において適応的な側面があることが示唆された。

Ⅰ．問題の背景と所在

1. 甘え

土居（2001）は，「甘え」の最も簡単な定義として“人間関係において相手の好意をあてにして振る舞うこと”（p.65）と定義し，“甘えには健康で素直な甘えと自己愛的で屈折した甘えがある”（土居，2001，p.109）と述べている。「健康で素直な甘え」とは，相手との相互的な信頼を軸にした良好な関係に根ざしており，自然発生的で，無自覚的である（土居，1971，1985，1997，2001）。これとは異なる「屈折した甘え」とは，甘えたくても甘えられない状況に陥ることによる，うらむ，ひがむ，ひねくれるなどの感情を特徴とした，一方的な要求の形をとった自己愛的なものである（土居，1971，2001）。

玉瀬・相原（2004）は，「甘え希求」（素直に甘えたい），「甘え受容」（甘えを受け入れたい），「甘え歪曲」（うらみたい，すねたい），「甘え拒絶」（一方的に甘えたい）の 4 因子からなる多元的「甘え」尺度を作成し，性格特性 5 因子（ビッグファイブ）との関連を検討した。主な結果として，「甘え受容」と「外向性」，「甘え歪曲」と「神経症傾向」との間に正の相関が，「甘え拒絶」と「外向性」，「開放性」，「調和性」との間に負の相関が確認されている。また，この多元的「甘え」尺度（玉瀬・相原，2004）は「甘え希求」と「甘え受容」を合わせて「相互依存的甘え」，「甘え歪曲」と「甘え拒絶」を合わせて「屈折した甘え」としている。「相互依存的甘え」は，先述の土居の「健康で素直な甘え」を捉えようとしたものである。したがって，この多元的「甘え」尺度は，甘えの健康的な側面と不健康な側面の両方を同時に測定できるという点で，「甘え」をより多面的に測定できる尺度であるとみなされる。

その後，玉瀬・相原（2005）は「相互依存的甘え」と思いやり，「屈折した甘え」と自己愛的傾向の関係について調べた。その結果，「相互依存的甘え」は「思いやり」と相関があり（r = .53），「屈折した甘え」は自己愛尺度の「自己中心的主体性」と相関があった（r = .50）。玉瀬・今村（2006）は「甘え」と愛着（アタッチメント）の関係について大学生を用いて実証的に検討することを目的とし，3 つの愛着の型（「安定型」「回避型」「両価型」）を測定できる内的作業モデル尺度（戸田，1988）との関連を調べた。玉瀬・今村（2006）は，甘えは健康な心の発達を促す上でなくてはならないものであり，甘えの体験を通して，対人関係のあり方を学ぶことがあると考え，また多元的「甘え」尺度は，「相互依存的甘え」はより健康な人において見られる心理的傾向であり，「屈折した甘え」はより不健康な人に見られる心理的傾向であるとした，精神的健康に関わる基礎的研究の測定用具としてその有用性が示されつつあることを示唆した。さらに，玉瀬・富平（2007）は大学生を対象にして，「甘え」と「友人の役割行動遂行」「自己受容」「良好な友人関係」の関係を調べ，「甘え」は対人関係を円滑にする上で

不可欠なものであり，素直で健康な甘えを適度にもつことは，良好な友人関係を構築する上での促進的要因になると考察している。

しかし，これらの従来の研究では，「屈折した甘え」と「相互依存的甘え」を独立して考えているが，実際にはこの 2 つの甘えが混合することが考えられる。以上のことから，本研究では，玉瀬・相原（2004）の多元的「甘え」尺度を用いて，どのような甘え方をしているのか群分けし，甘えの諸相を捉える。また，「甘え」は本来，対人関係の中で起こりうるものであるため，甘えの諸相の特徴は対人関係にあらわれると考えられる。そこで本研究では，対人関係の中でも親密性と個人志向性の否定的側面を取り上げて進める。その理由は以下に示す。

2. 親密性

青年期は，不安や動揺を抱えながら，親からの自立へと向かい，「自分とは何か」を問う自己の確立という課題に直面する。青年期の友人関係は自我同一性の形成に関連することが明らかにされている（宮下・渡辺，1992；宮下，1998；安井・谷，2008）。

Erikson（1959，1968）は，漸成発達理論において，青年期の発達段階にあたる第Ⅴ段階の「同一性 対 同一性拡散」の危機の次にあたる発達の第Ⅵ段階を「親密性 対 孤立」としている。Erikson（1959，1968）によれば，この段階においては，異性との親密性を中心としながらも，それと関連した形で，他の人々との親密性を形成することが重要となる。つまり，この段階においては，単に異性との親密性を築くだけでなく，様々な人々と親密な関係を結べることが必要となってくる（谷・原田，2011）。Erikson（1959，1968）によれば，このような親密性を形成するにあたって，まず重要なのは「相互性」（mutuality）である。「相互性」とは，人間関係の中で互いの欲求を認め合い，相互に欲求を満足させられるような関係性のことをいう（谷・原田，2011）。つまり，人間関係の中で，互いの欲求を認め合い，相互に欲求を満足させられるような関係性を築けることが相互性をもった親密性である。

本研究は，この相互性を含んだ親密性を取り上げることにした。このような相互性をもった関係においては，相手に自分の欲求を満たしてもらうだけでなく，自分も相手の欲求を認識してそれを満たすという相手側の視点を含んだ考え方が必要である。これは，相手があってはじめて存在する「甘え」と類似した概念であるといえる。つまり，「健康で素直な甘え」方をする者は，相手に自分の欲求を満たしてもらうだけでなく，自分も相手の欲求を認識してそれを満たすという相手側の視点を含んでいるため，親密性は高いが，「屈折した甘え」方をする者は，自分の欲求を満たすだけで，相手の欲求を満たすという相手側の視点を含まないため，親密性は低いと考えられる。

3. 個人志向性

伊藤（1993）は，発達の 2 側面としての個人化と社会化の両過程に注目し，発達的・適応的な観点から個人志向性・社会志向性という概念を提唱した。個人志向性とは，個としての自分自身を活かし，個性的で主体的な生き方を志向する自己実現的特性を意味する。しかし，伊藤

（1995）は，適応的で成熟した特徴をもつポジティブな側面と，不適応的で未熟な特徴をもつネガティブな側面が存在することを指摘している。すなわち，自らの個性を活かそうとする個人志向性は，他者との共存が伴わない場合は，利己性や個人主義（エゴイズム）が強まることになると述べている。

「甘え」とは，“人間関係において相手の好意をあてにして振る舞うこと”（土居，2001）であり，それは不適応な側面としては，相手の好意をあてにしすぎて，利己性や個人主義（エゴイズム）を強めて，自己中心的な振る舞いをしてしまうということが考えられ，これは別の言い方をすれば，個人志向性の否定的な側面によって甘えが生じていると考えられる。

そこで，本研究では，伊藤（1995）の個人志向性・社会志向性 PN 尺度の，個人志向性 N 尺度を用いて，個人志向性の否定的な側面から「甘え」をみることとする。仮説としては，「健康で素直な甘え」方をする者は，適度に相手の好意をあてにして振る舞うため，個人志向性の否定的側面が高くないと考えられる。「屈折した甘え」方をする者は，自分の欲求を満たすために，相手の好意をあてにしすぎて，自己中心的に振る舞うため，個人志向性の否定的側面が高いと考えられる。

4. 問題の所在

これまで述べてきたように，対人関係の広がりを見せる青年期後期における臨床心理学的援助を考えるうえで，甘えの諸相を捉えることは重要である。しかし，甘えには「健康で素直な甘え」と「屈折した甘え」の 2 側面が存在することを前提とした研究において，甘えが対人関係のどのような特徴と関連しているかについては明らかにされていない。

そこで，本研究では甘えを玉瀬・相原（2004）の多元的「甘え」尺度を用いて，「健康で素直な甘え」と「屈折した甘え」の両側面から捉えたうえで，どのような甘え方をしているのか，群分けをする立場を取り，青年期後期を対象とした甘え研究として，対人関係の中でも親密性と個人志向性の否定的側面を取り上げて進める。

Ⅱ．目的と意義

本研究は，青年期後期の大学生を対象とし，多元的「甘え」尺度（玉瀬・相原，2004）を用いて甘えの検証を行う。まず，因子分析を行い先行研究の通りの 4 因子に分かれるかを確認した後に下位尺度の得点を用いて Ward 法によるクラスタ分析を行い，甘えの群分けを行う。更に，それぞれの群の親密性および個人志向性の否定的側面尺度の得点の 1 要因分散分析を行って比較することで，各群の対人関係における特徴を検討することを目的とする。

青年期後期は親や家族以外にも様々な対人関係を営み，自立と自己形成の発達課題に取り組む時期である。その過程において甘えたくても甘えられない状況に陥り，自己愛的で屈折した甘えから対人関係がうまくいかなくなる可能性があるとすれば，実証的に甘えの諸相を検討することは，青年に対するカウンセリングや心理臨床の実践にも有益な示唆を与える一助となると考える。

Ⅲ．方法と手順

1. 調査対象者と調査期間

本研究は青年期後期における重要な心理学的テーマである甘えの諸相と親密性および個人志向性の否定的側面の関連が主題であるため，都内私立 A 大学に在籍する 18 歳から 24 歳の大学生男女を調査対象者とした。調査期間は，桜美林大学研究倫理員会の承認後から 2014 年 7 月であった（2014 年 5 月受理，受付番号 14003）。

2. 調査方法

調査方法には，質問紙法を採用した。まず，質問紙配布の承諾を得た講義の終了後に質問紙と封筒を一人一部ずつ配布し，倫理的配慮事項を含めた質問紙に関する口頭説明を 5 分程度行った。質問には無記名で回答したものを，封筒に入れてもらい，翌週の講義時間の後に回収箱を用いて回収する留置法を行った。

3. 質問紙の構成

(1) 多元的「甘え」尺度（玉瀬・相原，2004）

甘えを「素直で健康な甘え」と「屈折した甘え」の両面から測定するための尺度で，玉瀬・相原（2004）によって作成された。「甘え希求」,「甘え受容」,「甘え歪曲」,「甘え拒絶」の 4 因子で構成されており,「甘え希求」と「甘え受容」を合わせたものを「相互依存的甘え」とし,「甘え歪曲」「甘え拒絶」を合わせたものを「屈折した甘え」としている。項目は各 5 項目ずつの 20 項目からなり,「いつもそう思う」（4 点）から「全くそう思わない」（1 点）までの 4 件法にて回答を求める。得点が高くなるほど各因子の傾向が高いことを意味している。

玉瀬・相原（2004）によると，尺度の累積寄与率は 45%で，α 係数が「甘え希求」$\alpha = .72$,「甘え受容」$\alpha = .74$,「甘え歪曲」$\alpha = .79$,「甘え拒絶」$\alpha = .80$ である。「相互依存的甘え」は $\alpha = .72$,「屈折した甘え」は $\alpha = .79$ であり，内的一貫性は確認されている。また特性 5 因子との相関によって基準関連妥当性についても検討されている尺度である。

(2) 親密性尺度（谷・原田，2011）

親密性を「呑み込まれ不安を感じることなく，相互の欲求を満足させ合うという相互性をもった深い人間関係を築くことのできる特性」と定義し，谷・原田（2011）によって作成された。1 因子 10 項目からなり,「全く当てはまらない」（1 点）から「非常に当てはまる」（7 点）の 7 件法で回答を求める。得点が高くなるほど親密性の傾向が高いことを意味している。

谷・原田（2011）によると，α 係数は $\alpha = .87$ であり，内的整合性の観点から信頼性は高いとされている。また，基本的信頼感尺度，MEIS，異性不安尺度との相関によって構成概念的妥当性についても検討されている尺度である。

(3) 個人志向性 N 尺度（伊藤，1995）

伊藤（1993；1995）によって作成された，個人志向性・社会志向性 PN 尺度の一部である。伊藤（1993）は，自立や個別化に向かいつつ個性を尊重し主体的に行動する特性を示す，個人

志向性Ｐ尺度を作成した。その後，伊藤（1995）は，個人志向性と社会志向性の否定的な側面として，他者存在を考慮しない利己性や共感の欠如などを捉える個人志向性Ｎ尺度を開発した。

本研究では，個人志向性の否定的側面をはかるため，個人志向Ｎ尺度のみを用いた。１因子６項目からなり，「あてはまる」（５点）から「あてはまらない」（１点）までの５件法にて回答を求める。得点が高くなるほど個人志向性の否定的側面の傾向が高いことを意味している。

伊藤（1995）によると，Ｎ尺度の α 係数は $\alpha = .71$ であり，十分な内的一貫性を有していることが確認されている。また，Ｎ尺度は MPI 尺度との関連を分析し，尺度の併存的妥当性が検証されている。

(4) フェイスシート

対象者が青年期後期（18 歳～ 24 歳）の大学生に該当するかどうかを確認するために，年齢と学年を問う項目を設けた。

4. 分析方法

分析には SPSSver22.0 と Microsoft Excel 2010 を使用した。

分析方法は以下の通りである。

1）多元的「甘え」尺度，親密性尺度，個人志向性Ｎ尺度の各尺度は，尺度の作成後，時間が経ち対象となった大学生の心性に変化が生まれた可能性があること，尺度の一部のみを取り上げたものはその部分だけ施行すると因子構造が異なる可能性があることから，因子構造を検証するため，探索的因子分析を行った。また Cronbach の α 係数を算出し信頼性を確かめた。

2）多元的「甘え」尺度，親密性尺度，個人志向性Ｎ尺度の下位尺度得点から，これらの相関分析を行った。

3）どのような甘え方をしているのか群分けをするために，多元的「甘え」尺度をクラスタ分析し，χ^2 検定を行った。

4）各クラスタの特徴をみるため，各クラスタを独立変数，親密性尺度得点，個人志向性Ｎ尺度得点を従属変数とした一要因分散分析を行った。

Ⅳ．結果

1. 分析対象者

回収した質問紙は 304 部であった。そのうち 25 歳以上の学生，回答に不備があったもの，未記入であったものを除いた，280 名（有効回答率 92.11%，男性 103 名，女性 177 名）を分析対象者とした。平均年齢は 19.58 歳で，標準偏差（以下 *SD*）は 1.44 歳であった。

2. 因子分析

多元的「甘え」尺度，親密性尺度，個人志向性Ｎ尺度について因子構造を検証するため，探索的因子分析を行った。また Cronbach の α 係数を算出し信頼性を確かめた。

(1) 多元的「甘え」尺度

多元的「甘え」尺度 20 項目に対して，最尤法による因子分析を行った。その結果，先行研究と同じ 4 因子構造が妥当と考えられた。因子負荷量が .35 を満たない 2 項目（「4. 友達とけんかをしたときは，他の友達に何とかしてほしい。」「5. 自分が何か新しいことを始めるときは，誰かに後押しをしてほしい。」）を削除し，再び最尤法・Promax 回転を行った。最終的に 4 因子 18 項目からなる尺度となった。全分散を説明する累積寄与率は 60.9%であった。各因子と項目，回転後の因子パターン，共通性を表 1 に示す。

表 1　多元的「甘え」尺度の因子分析結果（Promax 回転後の因子パターン）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	共通性
「甘え拒絶」（α = .84）					
19. 自分の考えは周りに受け入れてほしいが，周りの人の考えはあまり受け入れたいとは思わない。	**.87**	.05	− .03	.01	.52
17. 勉強がうまくいかないときは誰かに助けてほしいが，私は誰かから助けを求められたくはない。	**.77**	− .07	− .11	.07	.56
16. 他人には私の気持ちを察してほしいが，自分はそうしたくない。	**.71**	.01	.01	.07	.41
20. 他人にはきつい本音を言うことがあっても，他人からは本音をいわれくはない。	**.65**	− .01	.07	.04	.71
18. 自分はある程度約束をすっぽかすことがあっても，他人にはそうされたくはない。	**.60**	.04	.09	− .05	.48
「甘え受容」（α = .83）					
8. 友達が勉強で行き詰っているときは，自分が相談にのってあげたい。	.05	**.80**	− .02	− .03	.53
6. 友達が将来どの職業につくべきか迷っているときは，自分が相談にのってあげたい。	.13	**.77**	− .01	− .08	.57
7. 身近な人の体調が優れないときは，自分をあてにしてほしい。	− .10	**.71**	− .00	.08	.61
9. 友達の日常生活に張り合いがなさそうなときは，自分が相談にのってあげたい。	.02	**.67**	− .06	.11	.48
10. 親しい人が落ち込んでいるときは，自分が慰めてあげたい。	− .16	**.54**	.09	.03	.36
「甘え歪曲」（α = .77）					
15. 周りの人が私の努力を認めてくれないと，ふてくされてしまう。	− .00	.04	**.83**	− .17	.16
14. 親しい人が自分の好意に応えてくれないと，すねてしまう。	− .13	.01	**.81**	.11	.46
12. 身内にわがままをきいてもらえないと，ふてくされてしまう。	.13	− .05	**.59**	.06	.43
13. 自分の要望が通らないときは，ついつい相手をうらむことがある。	.25	− .02	**.50**	.01	.64
11. サークル活動がうまくいかないとき，リーダーが努力をしてくれないと腹が立つ。	− .04	− .04	**.37**	.10	.63
「甘え希求」（α = .73）					
2. 勉強が上手くいかないときは，誰かを頼りにしたくなる。	.07	− .04	.01	**.99**	.47
1. 勉強について行けないときは，誰かに助けを求めたい。	− .07	.03	.01	**.67**	.99
3. サークル活動がうまくいかないときは，誰かに何とかしてもらいたい。	.02	.11	.05	**.44**	.24

N = 280　累積寄与率 = 60.9%

因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Ⅰ	—	− .22	.44	.11
Ⅱ		—	.03	.24
Ⅲ			—	.29
Ⅳ				—

各因子群のまとまりは，玉瀬・相原（2004）の因子分析結果と同じまとまりとなったため，先行研究の命名を引き継ぐことにした。第1因子5項目は相手からの甘えを拒否しようとする内容である「甘え拒絶」，第2因子5項目は相手から甘えられたいといった「甘え受容」，第3因子5項目は甘えを素直に表現できない「甘え歪曲」，第4因子3項目は素直に甘えたい「甘え希求」となった。

内的整合性を検討するために，Cronbachのα係数を算出したところ，「甘え拒絶」がα = .84，「甘え受容」がα = .83，「甘え歪曲」がα = .77，「甘え希求」がα = .73と，ある程度の内的一貫性が認められた。

(2) 親密性尺度の因子分析

親密性尺度10項目に対して最尤法による探索的因子分析を行った。固有値の変化（4.67，1.29，0.67，…）と因子の解釈可能性を考慮すると，1因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度1因子を仮定して最尤法による因子分析を行った。その結果，因子負荷量が.35に満たなかった1項目（「7. 他人に自分の心を打ち明けると，自分が呑み込まれそうに感じる。（逆転項目）」）を分析から除外し，残りの9項目に対して最尤法による因子分析を行った。その結果を表2に示した。

また，因子に高い負荷量を示した項目の平均値を算出することによって，親密性得点（M = 5.19，*SD* = 1.02）とした。内的整合性を検討するために，Cronbachのα係数を算出したところ，α = .87と十分な値が得られた。

表2　親密性尺度の因子分析結果

項目	I	共通性
5. 自分を支えてくれる相手がいて，自分も必要なときに相手の支えになることができる。	.87	.64
1. 自分が困った時に相談できて，相手が困った時に相談にのれる人間関係がある。	.80	.34
6. お互いに信頼し，心を打ち明けることのできる相手がいる。	.80	.19
4. 親しい人といるときに，お互いが満足し合える関係にある。	.77	.59
8. お互いある程度の犠牲を払ってでも助け合えるような人間関係がある。	.69	.75
9. 人と表面的な付き合いしかできない。*	.60	.63
2. 相手の欲求を満たすことで，自分が満足できるような人がいる。	.58	.47
10. 自分を見失いそうで，人を愛することができない。*	.47	.36
3. 人との付き合いは形式的なもので，自分は本当は孤独だと感じる。*		

*がついている項目は逆転項目を示す。

(3) 個人志向性N尺度の因子分析

伊藤（1993；1995）の個人志向性N尺度6項目に対して，調査を行い，最尤法による探索的因子分析を行った。固有値の変化（2.80，1.00，0.65，…）と因子の解釈可能性を考慮すると，1因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度1因子を仮定して最尤法による因子分析を行った。その結果を表3に示した。

また，因子に高い負荷量を示した項目の平均値を算出し，それを個人志向性の否定的側面得点（M = 3.06，*SD* = .81）とした。内的整合性を検討するために，Cronbach の α 係数を算出したところ，α = .77 と十分な値が得られた。

表 3　個人志向性 N 尺度の因子分析結果

項目	I	共通性
5. 自分中心に考えることが多い。	.72	.45
1. 周りのことを考えず，自分の思ったままに行動することがある。	.67	.43
2. 自分の性格は，わがままだと思う。	.65	.41
3. 個性が強すぎて，人とよくぶつかる。	.64	.21
4. 何ごとも独断で決めることが多い。	.46	.52
6. 人に合わせるよりは，たとえ孤独であっても自由なほうがよい。	.43	.19

3. 尺度間の相関分析

多元的「甘え」尺度，親密性尺度，個人志向性 N 尺度の各下位尺度得点から，尺度間の相関分析を行った。

多元的「甘え」尺度の因子分析における，各下位尺度得点の平均値と標準偏差は，「甘え拒絶」得点では平均値 1.81（SD = .58）点，「甘え受容」得点では平均値 2.90（SD = .58），「甘え歪曲」得点では平均値 2.29（SD = .59），「甘え希求」得点では平均値 2.74（SD = .65）であった。「親密性」得点では平均値 5.19 点（*SD* = 1.02），「個人志向性の否定的側面」得点では平均値 3.06（*SD* = .81）であった。これらの各下位尺度得点の相関分析を表 4 に示した。

表 4　多元的「甘え」尺度と親密性，個人志向性の否定的側面との関連

	甘え拒絶	甘え受容	甘え歪曲	甘え希求	親密性	個人志向性の否定的側面
甘え拒絶	—	− .18 **	.40 **	.12 **	− .32 **	.19 **
甘え受容		—	.00 **	.25 **	.45 **	− .27 **
甘え歪曲			—	.27 **	− .16 **	.33 **
甘え希求				—	.06 **	− .08 **
親密性					—	− .24 **
個人志向性の否定的側面						—

** p ＜ .01

その結果，「甘え拒絶」と「甘え歪曲」の間には中等度の正の相関が示され（r = .40，p＜ .01），「甘え受容」と「甘え歪曲」の間には無相関が示され（r = .00，p＜ .01），「甘え受容」と「甘え希求」の間には低い正の相関が示され（r = .25，p＜ .01），「甘え歪曲」と「甘え希

求」の間には，低い正の相関が示され（r = .27，p < .01）。「甘え拒絶」と「親密性」の間には低い負の相関が示された（r = − .32，p < .01）。「甘え受容」と「親密性」の間には中等度の正の相関が示され（r = .45，p < .01），「甘え受容」と「個人志向性の否定的側面」の間には低い負の相関が示された（r = − .27，p < .01）。「甘え歪曲」と「個人志向性の否定的側面」の間は低い正の相関が示された（r = .33，p < .01）。「親密性」と「個人志向性の否定的側面」の間は低い負の相関が示された（r = − .24，p < .01）。

4. 多元的「甘え」尺度のクラスタ分析

どのような甘え方をしているのか群分けするために，多元的「甘え」尺度の「甘え拒絶」得点と「甘え受容」得点，「甘え歪曲」得点，「甘え希求」得点を用いて，Ward 法によるクラスタ分析を行い，3 つのクラスタを得た。第 1 クラスタには 170 名，第 2 クラスタには 67 名，第 3 クラスタには 43 名の分析対象者が含まれていた。人数比の偏りを検討するために x 2 検定を行ったところ，有意な人数比率の偏りが見られた（x^2 = 97.55，df = 2，p < .001）。

次に得られた 3 つのクラスタを独立変数，「甘え拒絶」「甘え受容」「甘え歪曲」「甘え希求」を従属変数とした一元配置の分散分析を行った。

「甘え拒絶」についての各平均得点は，第 1 クラスタは 1.67 点（SD = .40），第 2 クラスタは 2.49 点（SD = .50），第 3 クラスタは 1.28 点（SD = .35）であった。一元配置の分散分析を行った結果，1%水準で有意な差が認められた（F (2，277) = 130.67，p < .001）。Tukey 法による多重比較を行ったところ，有意に第 2 クラスタがもっとも高く，次いで第 1 クラスタが高く，第 3 クラスタがもっとも低いという結果が得られた（図 1 参照）。

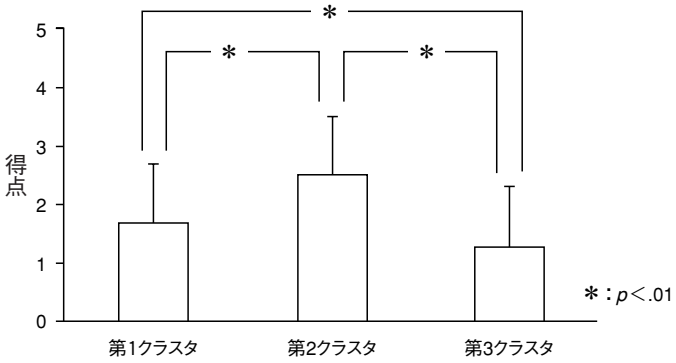

図 1　3 群の甘え拒絶得点

「甘え受容」についての各平均値は，第 1 クラスタは 3.08 点（SD = .48），第 2 クラスタは 2.52 点（SD = .63），第 3 クラスタは 2.79 点（SD = .57）であった。一元配置の分散分析を行った結果，1%水準で有意な差が認められた（F (2，277) = 28.16，p < .001）。Tukey 法による多重比較を行ったところ，有意に第 1 クラスタがもっとも高く，次いで第 3 クラスタが高く，

第 2 クラスタがもっとも低いという結果が得られた（図 2 参照）。

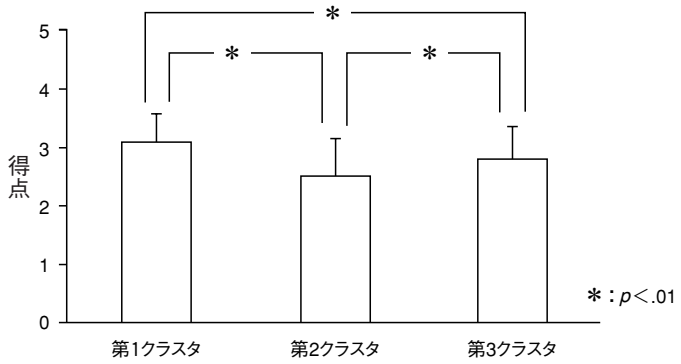

図 2　3 群の甘え受容得点

「甘え歪曲」についての各平均得点は，第 1 クラスタは 2.26 点（*SD* = .53），第 2 クラスタは 2.71 点（*SD* = .50），第 3 クラスタは 1.75 点（*SD* = .40）であった。一元配置の分散分析を行った結果，1%水準で有意な差が認められた（$F(2, 277) = 47.15$，$p < .001$）。Tukey 法による多重比較を行ったところ，有意に第 2 クラスタがもっとも高く，次いで第 1 クラスタ，第 3 クラスタがもっとも低いという結果が得られた（図 3 参照）。

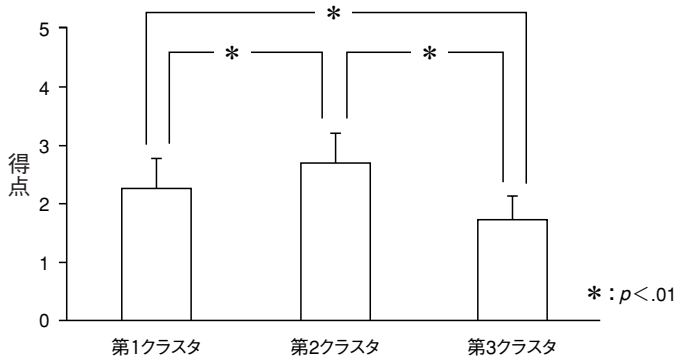

図 3　3 群の甘え歪曲得点

「甘え希求」についての各平均得点は，第 1 クラスタは 2.93 点（*SD* = .46），第 2 クラスタは 2.76 点（*SD* = .76），第 3 クラスタは 1.96 点（*SD* = .54）であった。一元配置の分散分析を行った結果，1%水準で有意な差が認められた（$F(2, 277) = 52.22$，$p < .001$）。Tukey 法による多重比較を行ったところ，有意に第 1 クラスタがもっとも高く，次いで第 2 クラスタ，第 3 クラスタがもっとも低いという結果が得られた（図 4 参照）。

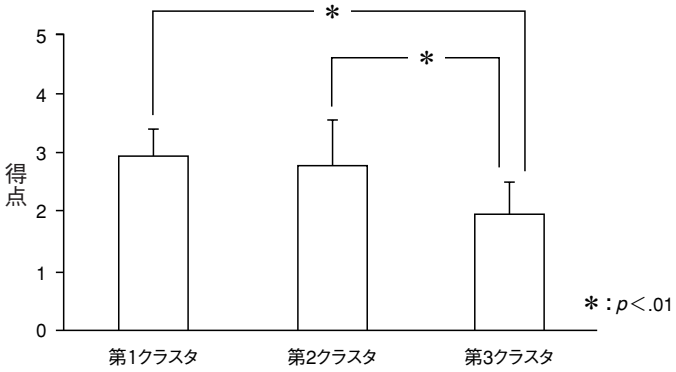

図 4　3 群の甘え希求得点

これらの結果を表にまとめと以下の通りである（表 5）。

表 5　多重比較のまとめ

甘え拒絶	第 2 クラスタ	＞	第 1 クラスタ	＞	第 3 クラスタ
甘え受容	第 1 クラスタ	＞	第 3 クラスタ	＞	第 2 クラスタ
甘え歪曲	第 2 クラスタ	＞	第 1 クラスタ	＞	第 3 クラスタ
甘え希求	第 1 クラスタ・第 2 クラスタ			＞	第 3 クラスタ

第 1 クラスタは，「甘え受容」と「甘え希求」が高く，「甘え拒絶」と「甘え歪曲」が中程度あった。このクラスタに属する者は相手からの甘えを受容するとともに，自らも甘えようとする傾向にあると考えられるため，「相互依存的甘え群」とした。第 2 クラスタは，「甘え拒絶」と「甘え歪曲」，「甘え希求」が高く，「甘え受容」が低かった。このクラスタに属する者は，自らは甘えようとするが，相手からの甘えは受け入れずに拒否し，またその甘え方もふてくされたり，すねたりすることが考えられるため，「屈折した甘え群」とした。第 3 クラスタは，「甘え拒絶」，「甘え歪曲」「甘え希求」が低く，「甘え受容」が中程度あった。このクラスタに属する者は，自ら甘えようとせず，また一方的な甘え方をしないことから，「甘え低群」とした。

5. 一元配置の分散分析

3 つの甘え群によって，「親密性」「個人志向性の否定的側面」の得点が異なるかどうかを検討するために，一元配置の分散分析を行った。

「親密性」についての各平均得点は，「相互依存的甘え群」は 5.38 点（SD = .89），「屈折した甘え群」は 4.50 点（SD = 1.03），「甘え低群」は 5.48 点（SD = 1.00）であった。一元配置の分散分析を行った結果，1%水準で有意な差が認められた（$F(2, 277) = 23.26$，$p < .001$）。Tukey 法による多重比較を行ったところ，「屈折した甘え群」が他の 2 群に比べて有意に低い

得点を示していた（図 5 参照）。

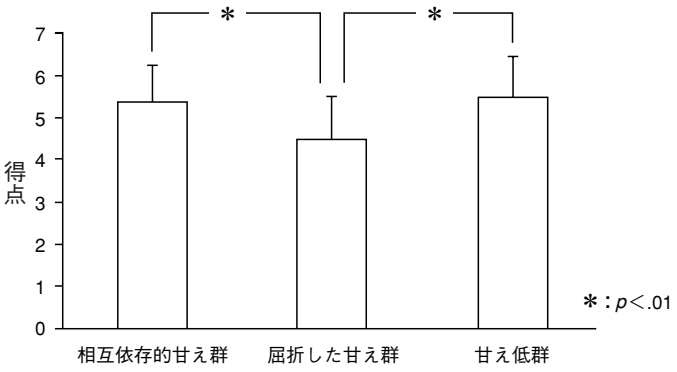

図 5　3 群の親密性得点

「個人志向性の否定的側面」についての各平均得点は，「相互依存的甘え群」は 2.92 点（*SD* = .79），「屈折した甘え群」は 3.49 点（*SD* = .72），「甘え低群」は 2.95 （*SD* = .78）であった。一元配置の分散分析を行った結果，1%水準で有意な差が認められた（$F(2, 277) = 13.48$，$p < .001$）。Tukey 法による多重比較を行ったところ，「屈折した甘え群」が他の 2 群に比べて有意に高い得点を示していた（図 6 参照）。

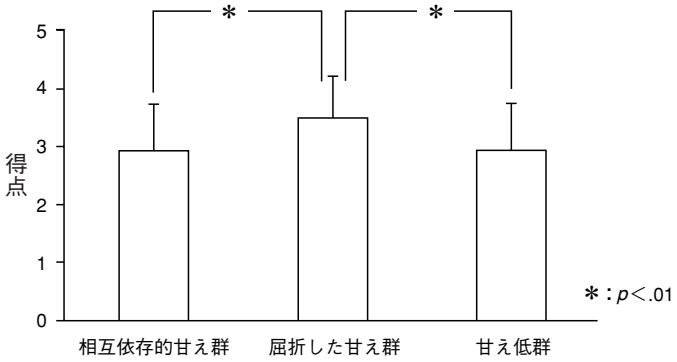

図 6　3 群の個人志向性の否定的側面得点

Ⅴ．考察

1．多元的「甘え」尺度，親密性尺度，個人志向性 N 尺度の因子構造

はじめに，多元的「甘え」尺度，親密性尺度，個人志向性 N 尺度の因子構造を検証するため，探索的因子分析を行った。その結果，多元的「甘え」尺度は，2 項目（「友達とけんかしたときは，他の友達に何とかしてほしい」「自分が何か新しいことを始めるときは，誰かに後押しをしてほしい」）の因子負荷量が .35 に満たなかったため除外されたが，「甘え拒絶」「甘え受容」

「甘え歪曲」「甘え希求」の 4 因子構造が認められ，玉瀬・相原（2004）とほぼ同じ結果となった。

親密性尺度に関しては，1 項目（「他人に自分の心を打ち明けると，自分が呑み込まれそうに感じる（逆転項目）」）が .35 に満たなかったため除外されたが，1 因子構造が認められ，谷･原田（2011）とほぼ同じ結果となった。谷・原田（2011）は，親密性を「呑み込まれ不安を感じることなく，相互の欲求を満足させ合うという相互性をもった深い人間関係を築くことのできる特性」と定義してこの尺度を作成しており，人間関係の中で，互いの欲求を認め合い，相互に欲求を満足させられるような関係性を指していると考えられた。

個人志向性 N 尺度については，1 因子構造 6 項目が認められ，伊藤（1995）と同じ結果となった。伊藤（1995）は，個人志向性の否定的側面を，個人への関心が高まった自己愛や個人主義（エゴイズム）とみなしており，本研究の「個人志向性の否定的側面」もそれにあたると考えられた。

2. 各下位尺度間得点の相関分析

次に，多元的「甘え」尺度，親密性尺度，個人志向性 N 尺度の下位尺度得点にて，相関分析を行った。その結果，「甘え拒絶」と「甘え歪曲」の間には比較的強い正の相関，「甘え受容」と「甘え歪曲」の間には無相関が示され，玉瀬・相原（2004；2005）と同じ結果となり，本研究でもそれが支持された。また，「甘え拒絶」と「親密性」，「甘え受容」と「個人志向性の否定的側面」の間には弱い負の相関が示され，「甘え受容」と「親密性」の間には比較的強い正の相関，「甘え歪曲」と「個人志向性の否定的側面」の間は弱い正の相関が示された。玉瀬・相原（2005）は，「甘え希求」と「甘え受容」を合わせた「相互依存的甘え」は「思いやり」と相関があり（r = .53），「甘え拒絶」と「甘え歪曲」を合わせた「屈折した甘え」は自己愛尺度の「自己中心的主体性」と相関がある（r = .50）結果を示しており，本研究でも妥当な結果となった。「甘え拒絶」とは，自分の側からは甘えたいという意識を持ちながら，他者に対して「～してあげよう」という気持ちはなく，周囲と協調などしないということであり（玉瀬・相原，2004），「甘え歪曲」とは，甘えを素直に表現できず，すぐに腹を立てたり，ふてくされたり，すねたりするような振る舞い方をすることを指している（玉瀬･相原，2004）。この「甘え拒絶」と「甘え歪曲」を合わせた「屈折した甘え」は，甘えたくても甘えられない状況に陥ることによる，うらむ，ひがむ，ひねくれるなどの感情を特徴とした，一方的な要求の形をとった自己愛的なものである（土居，1971，2001）。また，「甘え拒絶」は自分の欲求を満たすだけで，相手の欲求を満たすという相手側の視点を含まないために，相互性を含んだ「親密性」とは弱い負の相関があると考えられた。「甘え受容」とは，「相談にのってあげたい」「後押しをしてあげたい」など，相手からの甘えを求め，相手に対して積極的に関わっていこうとし，人とよい関係を保とうとする傾向がある（玉瀬・相原，2004）ため，ふてくされるといった「甘え歪曲」とは無相関であることが考えられた。また，自分の欲求を満たしてもらうだけでなく，自分も相手の欲求を認識してそれを満たすという相手側の視点を含んでいるため，相互

性を含んだ「親密性」とは比較的強い正の相関が示され，個人への関心が高まった自己愛や個人主義（エゴイズム）を測定している「個人志向性の否定的側面」とは弱い負の相関があると考えられた。また，「甘え歪曲」と「個人志向性の否定的側面」の間には弱い正の相関が示されたが，これも甘えを素直に表現できず，すぐに腹を立てたり，ふてくされたり，すねたりするような振る舞い方をすることと，個人への関心が高まった自己愛や個人主義（エゴイズム）は共通している部分があることが考えられた。しかし，「甘え受容」と「甘え希求」，「甘え歪曲」と「甘え希求」に弱い正の相関があったことに関しては，玉瀬・相原（2004）と同じ結果にならなかった。これについては，次のように考えることができる。「甘え希求」は甘えるという行動の出発点である。甘えたいと思ったときに，それが受け入れられるときもあれば，受け入れられないときもある。素直に甘えたいと思ったものの，甘えたくても甘えられない状況に陥った場合は，「うらむ」や「ひねくれる」「すねる」などの感情を引き起こす可能性も考えられる。そのため「甘え希求」と「甘え受容」の間だけでなく，「甘え希求」と「甘え歪曲」の間にも弱い正の相関があったのではないかと考えられる。玉瀬・相原（2004）は，「甘え希求」と「甘え受容」を合わせて，「健康で素直な甘え」である「相互依存的甘え」とみなしていたが，今後は，「甘え希求」と「甘え受容」を合わせて考えるのではなく，甘え方の諸様相として，「甘え希求」と「甘え受容」は別に取り扱う意味があることが示唆されたと言えよう。最後に「親密性」と「個人志向性の否定的側面」の間は弱い負の相関が示されたが，「親密性」と「個人志向性の否定的側面」は，「親密性」が人間関係の中で互いの欲求を認め合い，相互に欲求を満足させられるような関係性のことを指しているのに対し，「個人志向性の否定的側面」は個人への関心が高まった自己愛や個人主義（エゴイズム）を測定しているため，弱い負の相関があることが考えられる。

3. 多元的「甘え」尺度のクラスタ分析

多元的「甘え」尺度の「甘え拒絶」得点と「甘え受容」得点，「甘え歪曲」得点，「甘え希求」得点を用いて，Ward 法によるクラスタ分析を行い，3 つのクラスタを得た。その結果，第 1 クラスタは，「甘え受容」と「甘え希求」が高く，「甘え拒絶」と「甘え歪曲」が中程度あった。このクラスタに属する者は相手からの甘えを受容するとともに，自らも甘えようとする傾向にあると考えられるため，「相互依存的甘え群」とした。第 2 クラスタは，「甘え拒絶」と「甘え歪曲」，「甘え希求」が高く，「甘え受容」が低かった。このクラスタに属する者は，自らは甘えようとするが，相手からの甘えは受け入れず，またその甘え方もふてくされたり，すねたりすることが考えられるため，「屈折した甘え群」とした。第 3 クラスタは，「甘え拒絶」，「甘え歪曲」「甘え希求」が低く，「甘え受容」が中程度あった。このクラスタに属する者は，自ら甘えようとせず，また一方的な甘え方をしないことから，「甘え低群」とした。「相互依存的甘え群」は 170 名，「屈折した甘え群」は 67 名，「甘え低群」は 43 名と，人数の偏りはみられたが，それぞれの甘え方を示す群が一定数いることが確認された。

4. 一元配置の分散分析

3つの甘え群によって，「親密性」「個人志向性の否定的側面」の得点が異なるかどうかを検討するために，一元配置の分散分析を行った。その結果，「親密性」について，「相互依存的甘え群」と「屈折した甘え群」では「相互依存的甘え群」の方が，「屈折した甘え群」と「甘え低群」では「甘え低群」の方が，得点が高いことが示された。また，「個人志向性の否定的側面」について，「相互依存的甘え群」と「屈折した甘え群」では「屈折した甘え群」の方が，「屈折した甘え群」と「甘え低群」では「屈折した甘え群」の方が，得点が高いことが示された。

本研究での「親密性」とは，「？み込まれ不安を感じることなく，相互の欲求を満足させ合うという相互性をもった深い人間関係を築くことのできる特性」（谷・原田，2011）をさし，「個人志向性の否定的側面」とは，「個人への関心が高まった自己愛や個人主義（エゴイズム）」（伊藤，1995）をさしている。すなわち，理論的には「親密性」が高く，「個人志向性の否定的側面」が低い群が，対人関係において適応的であると考えられ，「親密性」が低く，「個人志向性の否定的側面」が高い群は，対人関係において不適応的であると考えられる。

本研究の結果にこれを対応させてみると，対人関係で適応的な群は，「親密性」が高く，「個人志向性の否定的側面」が低い「相互依存的甘え群」と「甘え低群」であると考えられる。また，対人関係において不適応的なのは，「親密性」が低く，「個人志向性の否定的側面」が高い「屈折した甘え群」であると考えられる。

仮説では，「健康で素直な甘え」方をする者は，「親密性」が高く，「個人志向性の否定的側面」が低い傾向に，「屈折した甘え」方をする者は，「親密性」が低く，「個人志向性の否定的側面」が高い傾向にあると考えていた。本研究の結果から，「相互依存的甘え群」が「親密性」が高く，「個人志向性の否定的側面」が低い群となり，「屈折した甘え群」が「親密性」が低く，「個人志向性の否定的側面」が高くなったことから，仮説は部分的に支持されたといえよう。

しかし，仮説に反して「甘え低群」もまた，「親密性」が高く，「個人志向性の否定的側面」が低い結果となった。本研究では，青年期後期の対人関係を意識する時期に，「甘え低群」が一定数存在し，また健康的な対人関係を持っていることが示唆された。「甘え低群」は，自ら相手に甘えたいと思わないが，相手から甘えられたときにはそれを受け入れるため，自分中心にならないことが考えられる。これは一概に，「甘え」には健康的な側面と不健康な側面というだけでなく，甘えないこともまた対人関係において適応的な側面があることが示唆された。

今後の課題としては，「甘え」には健康な側面と不健康な側面というだけでなく，発達段階に応じた甘えの質を考慮する必要があると考えられる。また玉瀬・相原（2004）は，「甘え希求」と「甘え受容」を合わせて「健康で素直な甘え」である「相互依存的甘え」とみなしていたが，今後は「甘え希求」と「甘え受容」を合わせて考えるのではなく，甘え方の諸様相としてそれぞれを別に取り扱って研究を進めていくことが望ましいと考えられる。さらに本研究では，甘え方によってどのような対人関係の特徴を示すかについて，「親密性」と「個人志向性の否定的側面」を用いて研究したが，対人関係においてどの程度満足しているかはわかっていない。今後，対人関係の満足度を研究することによって，各群の特徴的な甘え方が，自分の対

人関係のあり方として満足できているのか検討し，甘え方と対人関係の特徴についてさらに深く研究を重ねる必要があるだろう。

付記

本論文の調査にあたり，ご協力いただきました先生方，及び質問紙の回答にご協力いただきました学生の皆様に心より御礼申し上げます。

引用文献

土居健郎（1971）.「甘え」の構造　弘文堂
土居健郎（1985）.「表と裏」 弘文堂
土居健郎（1997）.「甘え」理論と精神分析療法　金剛出版
土居健郎（2001）. 続「甘え」の構造　弘文堂
Erikson，E．H.（1959）. Childhood and society．New York：W．W．Norton & Company.（仁科弥生（訳）（1977，1980）. 乳児期と社会 1．2　みすず書房）
Erikson，E．H.（1968）. Identity and the life cycle．New York：W．W．Norton & Company.（小此木啓吾（訳編）（1973）. 自我同一性　誠信書房）
伊藤美奈子（1993）. 個人志向性･社会志向性尺度の作成及び信頼性･妥当性の検討　心理学研究 **64**，115-122
伊藤美奈子（1995）. 個人志向性・社会志向性 PN 尺度の作成とその検討　心理学研究 13（1），39-47
宮下一博（1998）. 青年の集団活動への関わり及び友人関係とアイデンティティ発達との関連 千葉大学教育学部研究紀要 **1**（46），27-34
宮下一博･渡辺朝子（1992）. 青年期における自我同一性と友人関係　千葉大学教育学部研究紀要 **40**，107-113
玉瀬耕治・相原和雄（2004）. 大学生の「甘え」と特性 5 因子との関係　奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要 **13**，23-31
玉瀬耕治･相原和雄（2005）. 相互依存的甘えと思いやり，屈折した甘えと自己愛的傾向，奈良教育大学紀要 **54**（1），49-61
玉瀬耕治・今村友美（2006）.「甘え」と愛着（アタッチメント） 教育実践総合センター研究紀要（**15**），39-46
玉瀬耕治・富平美智子（2007）. 大学生の「甘え」と友人関係　帝塚山大学心理福祉学部紀要 **3**，59-72
谷冬彦・原田新（2011）. 新たな親密性尺度の作成　神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 **5**（1），1-7
安井圭一・谷冬彦（2008）. 現代青年の友人関係と自我同一性との関連　日本パーソナリティ心理学大会発表論文集（17），212-213